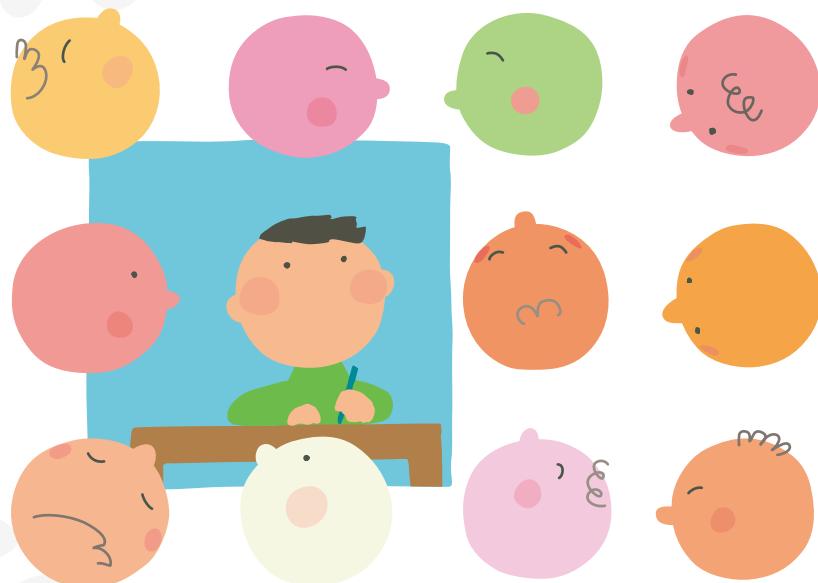


When a Parent has Cancer: Supporting Children in School setting

親のがんになったとき

子どものために学校にできること - 第2版 -

Support for Children with Parental Cancer at School



大切なお父さんやお母さんががんになったとき、
子どもたちはどんな思いで学校生活を送っているのでしょうか。
がんになった家族をもつ子どもの気持ちに寄り添い
家庭と学校がつながっていくようにと、この冊子を作りました。

もくじ

はじめに	01
第2版作成にあたって	02
親ががんになったとき・子どもにみられる変化	03
子どもの年齢に応じた特徴と対応	04
子どもにがんを伝えるとき	05
大きな変化があるとき ー グリーフサポートー	06
学校での支援の現状	08
学校での支援の実際（1）－小学校教員－	11
学校での支援の実際（2）－中学校・高等学校教員－	12
学校での支援の実際（3）－養護教諭－	13
学校での支援の実際（4）－スクールカウンセラー－	15
親が学校に望むこと	16
子どもを支えるための連携	18
学校にできること	19
おわりに	19
関連情報	20

はじめに

年々がんに罹患する人々は増加し、子育て世代の患者さんも増えています。がんは家族全体に大きな影響を及ぼします。がん患者さんにとって、自分の治療をしながらの子育ては、心身共に非常に厳しいものです。子どもにあっても、親ががんになったことによる影響は大きく、さまざまな心身の不調や問題が生じることがあります。

学齢期の子どもたちは、一日の多くの時間を学校で過ごしています。学校と家族が協力して、子どもたちを支えていくことができたら、厳しい状況にあっても希望を持つことができるのではないかと思います。

私たちは、親ががんになった子どもたちへの支援について、学校での現状を把握し支援の方法について検討するために、学校の先生方、そして学齢期のお子さんのいるがん患者さんのご協力を得て、いくつかの調査をいたしました。

2010年3月に栃木県内の養護教諭の方々を対象に、2010年12月に小・中学校の教員の方々（養護教諭を除く）を対象に、「がんの親をもつ子どもへの支援に関する調査」（郵送式アンケート調査）を実施しました。2011年には、東京近郊にお住いの小・中学生のお子さんのいるがん患者さんやご家族へのインタビュー調査を行いました。この冊子はこれらの調査をもとにして作成しました。

学校の先生方は、学習面での教育のみならず、子どもたちの心身の成長・発達に関わるたくさんの課題に向き合って、きわめて多忙な日々を送っておられることと思います。そのような中で、親ががんになって苦悩している子どもたちがおり、多くの時間を過ごす学校での支援はとても大切であることもご理解いただければうれしく存じます。

親御さんの病気の状態や治療状況、ご家族の生活状況は千差万別ですし、子どもの年齢や性格、状況の理解や反応はさまざまです。置かれた環境や立場を通して、一人一人の子どもと家族に個別的に支援していくことが求められるでしょう。その際に、この冊子が少しでも参考になればと願っています。

初版発行に際して 2012年3月



第2版作成にあたって

子育て世代のがん患者数は増加しており、国立がん研究センターの調査(井上ほか、2015)では、18歳未満の子どもがいる親で、新たにがんと診断される患者さんは年間約5万6千人、その子どもたちは約8万7千人で、平均年齢は11.2歳であることが分かりました。親である患者さんとその配偶者は子育て世代に特有の悩みを抱えることになり、子どもにもさまざまな影響が及びます。

ここ十年の間に、がんの親をもつ子どもたちへのサポートに関心が向けられるようになりました。学校や病院、相談機関での個別的なサポートのみならず、子どものためのサポートグループ、グリーフケアなど、医療関係者を中心に少しづつ取り組みが広がってきています。

私たちが2012年に学校の先生方を対象として作成した冊子(初版)は、学校関係者だけでなく、医療関係者や患者さんご家族にも手に取っていただく機会を得、多くの方に配布させていただきました。そのうち900通を超える冊子に関するアンケートの回答が集まり、有用性の検討を行ってきました(2012～2016、日本心理臨床学会にて発表)。そして、2017年に高校教員を対象に、また2018年にスクールカウンセラーを対象に、がんの親をもつ子どもの支援経験やニーズを把握するためのグループインタビューを実施しました。

今回、第2版の作成にあたっては、初版で有用だと評価された部分はそのまま残し、新しい調査の結果も追加して、ページを増やすこととしました。実際例は役に立つという声が多くありましたので、高等学校やスクールカウンセラーの調査からの実際例を追加しました。プライバシーに配慮して記載しております。また、学校と家庭、医療機関との連携に関してモデル図をより具体的にしました。

学校の先生方、医療関係者の方々は、多くの仕事を抱えきわめて多忙な毎日を送っておられます。そのような中、「がん教育」の実施が本格化し、がんについての知識を授け、いのちの大切さを伝えていくというお立場もあります。そのような折に、親が治療中であったり、大切な人とお別れをした後であったり、子ども自身が病気治療中であったりという状況の子どもたちやご家族のことも心にとめてくださいねと思います。子どもたちの置かれた状況はさまざま、理解や反応も一人ひとり異なりますので、個別的に支援していくことが求められるでしょう。その際に、この冊子が少しでも参考になれば幸いです。

2019年3月



親ががんになると、その影響は家族全体に及びます。家族の一員としての子どもたちは、親の病気のさまざまな局面において生活が変化し大きなストレスを受け、行動面、認知面、情緒面でのさまざまな変化を生じることがあります。

子どもの苦悩は、表出された言動によって周囲にはっきり分かることもありますが、家族に負担をかけたくないという気持ちから、不安や心配を自分の内に抱え込んでしまうこともあります。特に、自分のせいで親が病気になり、親の保護を失ってしまうのではないかという罪悪感や不安、悲しみは、多くの子どもが共通して抱えている感情です。

子どもにみられる変化

年少の子どもの場合、発達の退行が生じることがあります

母親から離れられなくなったり、登校を渋ったり、今まで簡単にできていたことができなくなり親の助けを求めたりすることがあります。

これまでと違った、その子どもらしくない言動を見せることがあります

活発な子どもが不安げで沈んだ様子になったり、おとなしい子どもが反抗的になったりすることがあります。

イライラして攻撃的になったり、落ち着きがなくなったりすることがあります

学校で些細なことに怒りの感情を噴出させたり、授業や活動に集中できず落ち着きがなくなったり、投げやりになったりすることがあります。

学業に影響が出ることがあります

心を乱す事態が続くなかで学業どころではなくなり、宿題をしてこなくなったり、忘れ物が多くなったり、成績が落ち込んだりすることがあります。

罪悪感や責任感が強くなりすぎることがあります

体調の悪い親を残して友達と遊びに行くことに罪悪感や不安感を抱いたり、家事や弟妹の世話をするなど、頑張りすぎてしまう子どももいます。

うつ病や不安症の兆候を示すことがあります

眠れなくなったり、食事がとれなくなったり、刺激に過敏になったり、気分の落ち込みがひどくなったりすることがあります。

● 親の病気に対する子どもの反応はさまざまで、個人差があります

● これらの反応や変化は、家族の非常事態にあっては自然の反応でもあります

● 子どもからのSOSとして受けとめ、サポートしましょう

● 必要な場合はスクールカウンセラーや専門家と連携しましょう

子どもの年齢に応じた特徴と対応

親のがんをめぐる子どもの理解や反応は、年齢や発達状況によって異なっています。ここではその特徴と対応について、大きく幼児期、学童期、思春期に分けて紹介します。

幼児期（～6歳頃）

- 発達段階**
- ・母子の結びつきが強く、家族が生活の中心である
 - ・自己中心の魔術的思考をしやすい時期
 - ・死は可逆的なものだと考える
- 特 徴**
- ・がんは初めて聞く言葉で、ショックは少ないかもしれない
 - ・親ががんになったのは、自分のせいだと考える
 - ・がんがうつると考える
- 対 応**
- ◉ 人形や絵本を使ったり、絵を描いたりしながら話す
 - ◉ 誰が何の世話をしてくれるか、具体的に伝える
 - ◉ 普段と変わらない生活を保つ

学童期（6～12歳頃）

- 発達段階**
- ・学校で仲間との活動、対人関係が増していく
 - ・具体的に物事を考える時期
- 特 徴**
- ・がんという言葉を聞いたことがあり、命にかかる病気だと知っている
 - ・がんがどういう病気なのか、どういう治療をするのかを知ろうとする
 - ・死について尋ねてくる。9歳位になれば死の最終性を理解できる
- 対 応**
- ◉ 質問には、分かりやすく具体的に答える
 - ◉ 学校や課外活動など、日常生活を維持できるようにする

思春期（12～18歳頃）

- 発達段階**
- ・親からの自立と依存の相反する感情を体験している
 - ・友人関係の悩み、将来への不安を感じている
 - ・自己中心的な考え方や反応をしがちな時期
- 特 徴**
- ・不安や心配、怒りの感情を抱きつつも親とは話をしたがらないかもしれない
 - ・親を支えることができる年齢ゆえに、親への気遣いや責任感と自己中心の活動をすることの間での葛藤がある
- 対 応**
- ◉ 状況をできるだけ正直に伝え、子どもの意見を聞きつつ決定していくことも必要
 - ◉ 友人と過ごしたり自分の時間を過ごしたりしていいことを伝える

* [引用] 小林真理子 (2013) : 親のがんを子どもにどう伝え、どう支えるか. がん看護 18巻 1号

子どもにがんを伝えるとき

親の病気を子どもに伝える際、「3つのC」を念頭において話すことが大切だと言われています。がんを伝えることの利点は、起きている大切な事実を、お子さんも含めた家族全員で共有し、子どももケアの輪の中に入れることができます。親子のコミュニケーションは子どもに安心を与え、自己肯定感を高めるといわれています。

子どもに伝えたい3つのC

① Cancer がんという病気であること

病名がわからないことで、子どもは大人が予想しないような心配をすることがあります。“がん”という言葉を使って、風邪のようにすぐ治る病気とは違うことを知らせることも大切です。子どもの理解に合わせて、がんの種類や治療の内容、予測される副作用、生活への影響などを伝えましょう。

② not Catchy うつらないこと

がんはうつる病気ではないと知ることは、子どもにとっては大切な情報です。感染症と違って、お母さんやお父さんに近づいても大丈夫との安心感につながります。

③ not Caused 誰のせいでもないこと

子どもは「僕が悪い子だったから、お母さん / お父さんが病気になってしまった」と思い込むことがあります。誰のせいでも、何かをしたから、あるいはしなかったから、がんになったわけではないことを伝え、罪悪感を取り除いてあげましょう

* M. アッセンブラー : KNIT (Kids Need Information Too) プログラムより

Q&A

Q 下の子はまだ小さいので、上の子だけに話そうと思っています。問題はありますか？

A きょうだい間で秘密ができると、上の子の負担が大きくなってしまいます。まずは一緒に幼い子どもにも分かる言葉で伝え、上の子には後で詳しく話すなど、子どもの理解や特性に応じて伝えましょう。

Q 子どもに話したけれど、理解できたのか。不安にさせてしまったのではと心配です。

A 話した後の子どもの様子を見守りながら、質問や気持ちを話しやすい雰囲気を作るのも大切です。一度に理解することは難しいので、経過の中でその都度、情報を伝えていくことが子どもの不安を少なくします。病院の担当医や看護師、心理士、医療ソーシャルワーカー、学校の先生、スクールカウンセラーなどに相談することもできます。

* [参考] M. アッセンブラー & Hope Tree プロジェクトチーム
「わたしだって知りたい！－親が“がん”になったとき 子どもにどう伝え、どう支えるか－」

大きな変化があったとき —グリーフサポート—



親の状態が悪くなり、大切な人とお別れをすることは、子どもの日常生活に大きな影響を与え、心身のエネルギーや人間関係に揺らぎをもたらします。

教員と家族が密に連絡を交わし、見守る中で気づいた子どもの様子を把握し合うことが必要です。

大切な人とのお別れが近づいたとき

家庭内に思いもよらないことが起こり不安定な状況が続くとき、子どもにとって学校生活を続けることは、エネルギーを要することです。その一方で、時間割りに沿った流れがある学校生活は、「思いもよらないことが起こりにくい」場として、気持ちの安定をもたらすこともあります。

お別れが近づいたときには、急な家庭からの連絡があるかもしれませんため、周囲の状況やタイミングに配慮しながら、その子どもに声をかける必要があります。

大切な人とお別れをしたとき ~グリーフサポート~

グリーフとは、喪失を体験した後に生じるあらゆる反応です。

大切な家族とお別れをした後、それまでのあたりまえだった日常は大きく変化し、子どもの姿にも変化がみられます。その変化は、誰にでも起こり得るものであり、困難な現実と精一杯に折り合いをつけていこうとする子どもの姿もあります。

グリーフの6つの基本概念

- ① グリーフは、大切な存在を失ったことによっておこる自然な反応です
- ② その反応は人によって異なります
- ③ その反応に法則があるのではなく「正しい」も「間違い」もありません
- ④ 死はそれぞれ異なり一人一人の体験も異なります
- ⑤ グリーフに影響を与える要因は複数ありますこれらが重なり合って表現されます
- ⑥ グリーフはすっかり消えることはなく「乗り越える」ものではありません

*【引用】The Dougy Center (1999) "Helping Children Cope with Death" (小嶋訳)



子どものグリーフ反応

「親ががんになったとき・子どもにみられる変化」(3ページ)も参照してください

ここでは、グリーフとして学校で生じやすい反応を追加します。

学業に関して

喪失後、日常の中で感じる様々な変化に気力を消耗し、集中したり、記憶したり、新しいことに興味を向けたりするエネルギーがわいてこないことがあります。

行動・情動

周囲に心配をかけないように振る舞い「よい子」にみえることがあります。他方、感情のコントロールがうまくいかず、反抗的な態度や「どうでもいい」と自暴自棄な態度を見せることがあります。

身体・健康

グリーフを抱えている子どもは免疫力の低下や疲労により、身体に不調をきたすことがあります。腹痛、頭痛、発熱、よくケガをするなどにより、保健室に頻繁に通うこともあります。

他者との関わり

大切な人の別れにより、家庭での役割分担や友人との会話内容が変化し、これまでよく一緒にいた家族や仲間のそばにいるよりも、単独行動を好むことがあります。

思春期の子どもの場合

危険を冒す振る舞いや反社会的な行動（窃盗、暴力など）がみられることがあります。

子どもの声

お父さんが死んで、初めて学校に行ったとき、「だいじょうぶ？」って聞かれて、どう応えていいかわからなかった（10歳女児）



元気だしてねって言われることが多かったから、しばらくは笑顔を見せちゃいけない気がしてた（9歳男児）

先生が友達のいない時を選んで、家のことを聞いてくれたからよかった（11歳女児）



教員にできること

- ◎ 保護者と連絡を取り、死別の状況や子どもの様子、配慮してほしい点を把握する
- ◎ 子どもには「話したくなったら教えてね」と声をかけ、子どものペースに合わせて対応する
- ◎ クラス全体には、子どもと保護者の了承が得られた範囲のことを伝え、今までと同じように生活できるように配慮をする

※学校場面でのより具体的な対応は、参考文献を参照してください。

学校での支援の現状

栃木県内の教員と養護教諭の先生方にご協力をいただき、がんの親をもつ子どもへの支援に関する調査を実施しました。この調査の中から、支援の現状についてご紹介します。

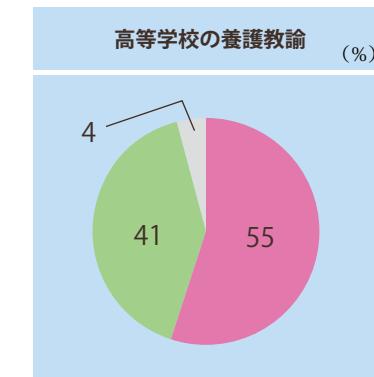
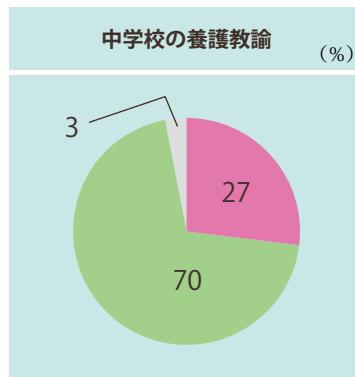
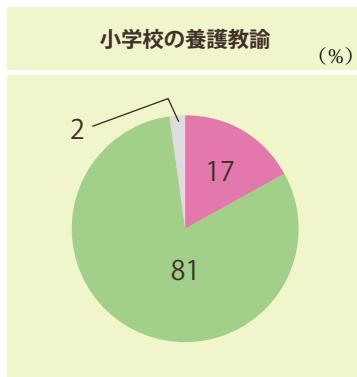
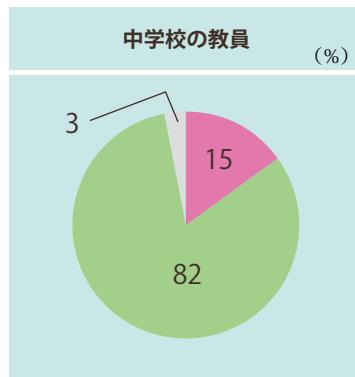
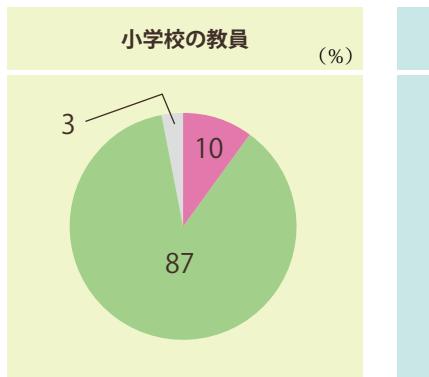
教員（常勤）

- 回答者数：568名
- 性別：男性 247名／女性 321名
- 平均年齢： 40.5 ± 10.0 歳
- 平均経験年数： 16.7 ± 10.2 年
- 小学校 385名／中学校 183名

養護教諭

- 回答者数：250名
- 性別：男性 0名／女性 228名
- 平均年齢： 44.5 ± 9.9 歳
- 平均経験年数： 21.3 ± 10.8 年
- 小学校 152名／中学校 69名／高等学校 29名

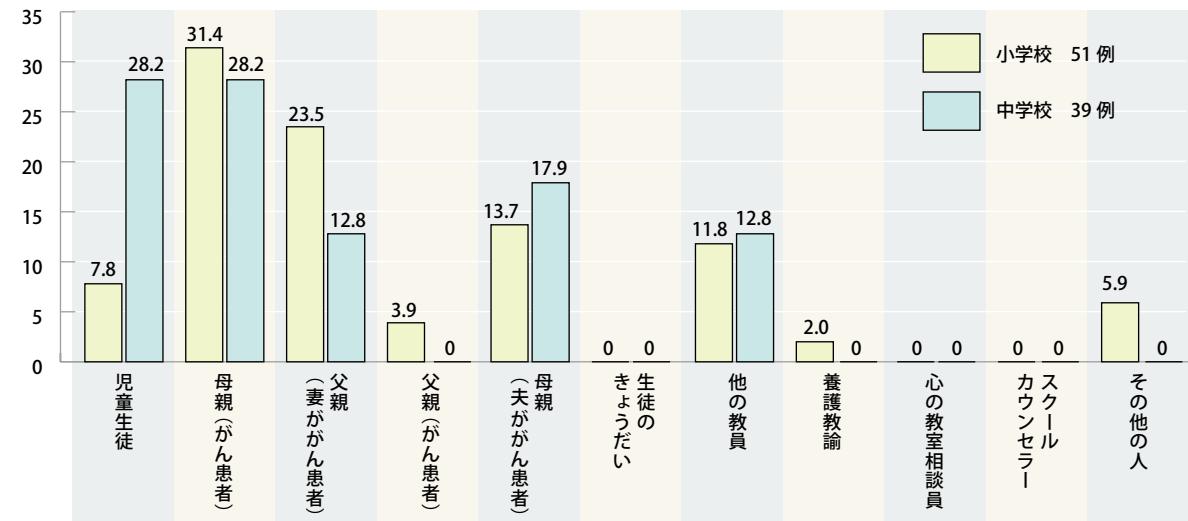
1. がんの親をもつ子どもに関する相談を受けたことがありますか？



教員では、小学校で10%、中学校で15%に、養護教諭では、小学校で17%、中学校で27%、高等学校で55%に、“がんの親をもつ子ども”に関する相談経験がありました。養護教諭と一般教員のいずれにおいても、小学校より中学校の方が相談経験は多く、高等学校の養護教諭では半数以上に上ることが分かりました。

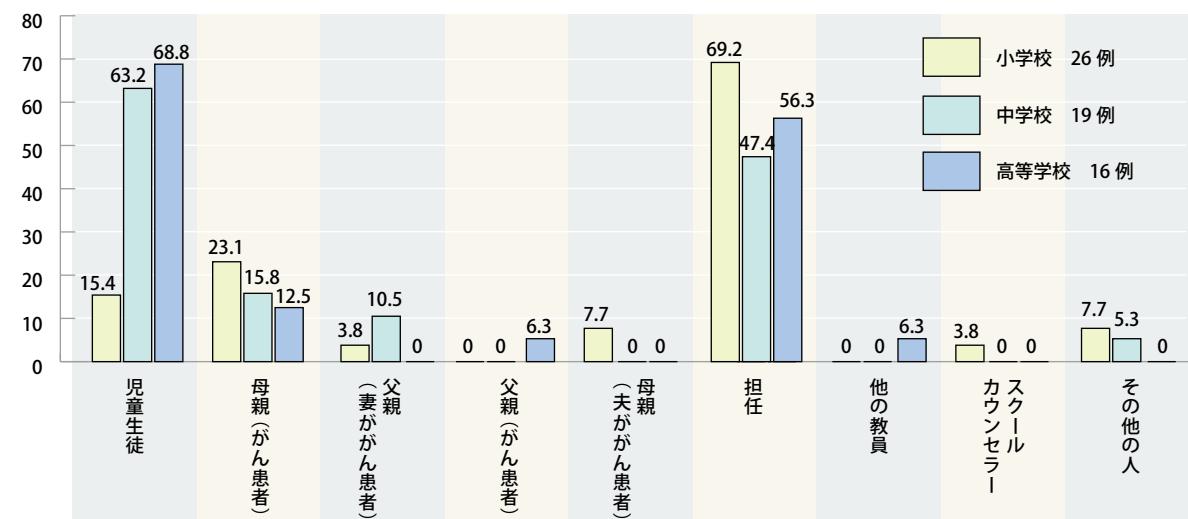
2. どなたからの相談でしたか？（1. の質問で「ある」と答えた方の回答）

◆ 教員が相談を受けた相手（%）（複数回答）



教員の回答の内訳をみると、小学校では、保護者（がんに罹患した親、またはその配偶者）からの相談が多く、なかでも母親からの相談が半数を占めており、生徒本人からは8%でした。一方、中学校では、生徒本人からの相談とがんに罹患した母親からの相談は同率の28%と、生徒本人からの相談も多いことが分かりました。

◆ 養護教諭が相談を受けた相手（%）（複数回答）



小学校では、約7割が担任からの相談を経験していますが、児童からの相談は15%となっています。一方、中学校と高等学校では6～7割近くが生徒本人からの相談を受けており、担任からの相談は半数程度でした。

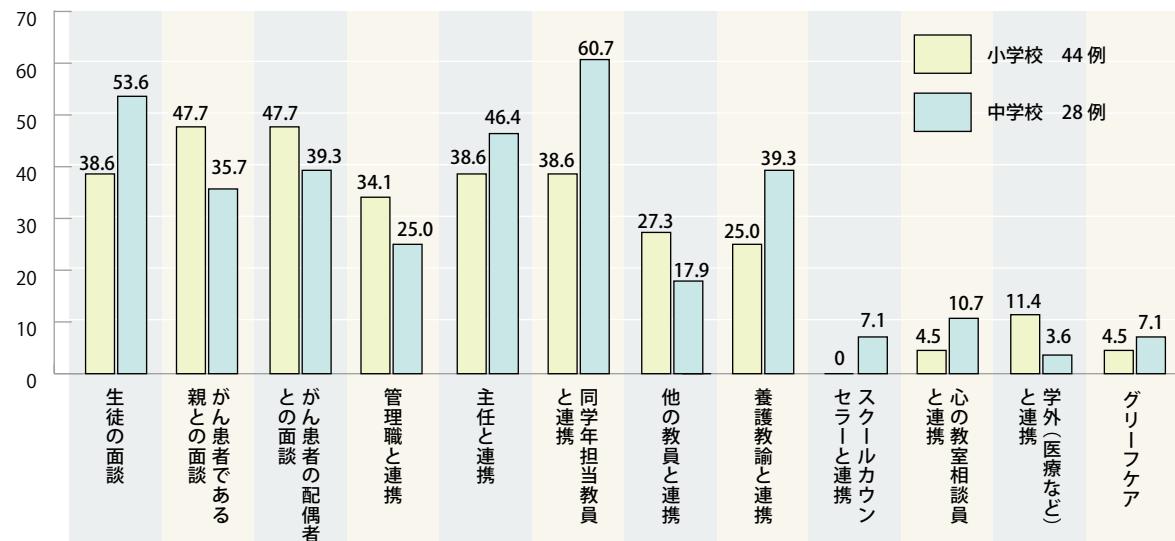
小学校・中学校・高等学校において、保護者（がんに罹患した親、またはその配偶者）からの相談の比率は20～25%程度と少ないことが分かりました。

学校での支援の実際（1）

—小学校教員—

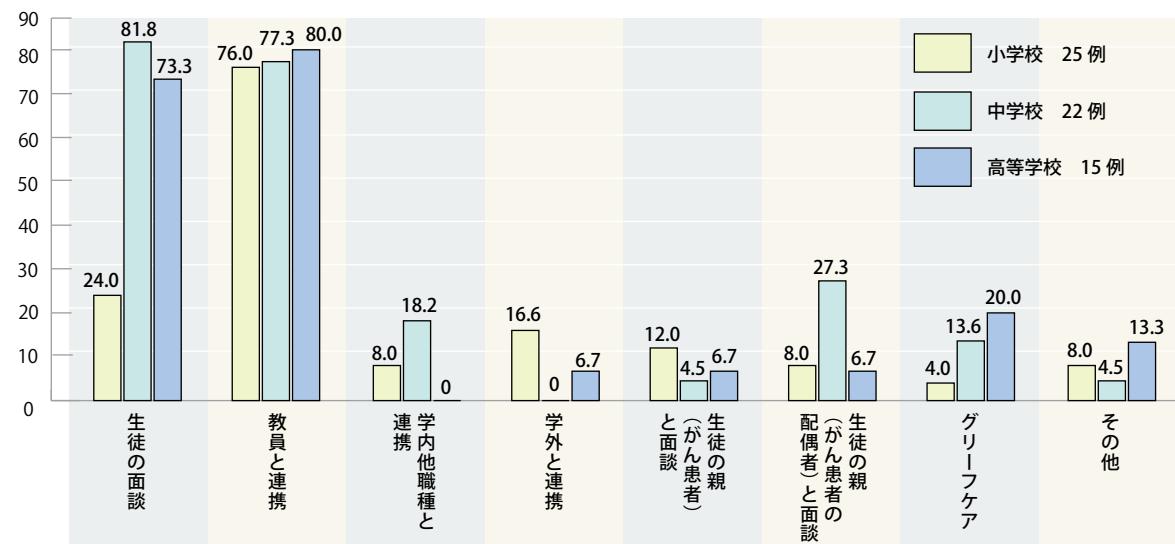
3. どのような関わりをされましたか？（支援経験が「ある」と答えた方の回答）

◆がんの親の相談を受けた教員が行った関わり（%）（複数回答）



“がんの親をもつ子ども”的支援経験がある教員の関わりの内容についてみると、小学校では保護者（がんに罹患した親、またはその配偶者）との面談が多く、次いで、生徒本人との面談となっています。中学校では、小学校よりも生徒本人との面談を行う割合が高いことが分かりました。また小学校・中学校ともに、支援の際、教員は他の教員（同学年担当や学年主任など）と協力しながら、子どもや親をサポートしているようです。

◆がんの親の相談を受けた養護教諭が行った関わり（%）



養護教諭については、小学校では「担任や学年主任と連携をとった」が顕著に多かったのに対し、中学校と高等学校では「生徒と面談した」と「担任や学年主任と連携をとった」の二つが多くなっています。小学校・中学校・高等学校のすべてにおいて、担任や学年主任など、他の教員と連携して間接的に子どもを支えている一方で、中学校と高等学校では、生徒本人との面談という直接支援も行われていることが分かりました。

小学校と中学校の教員へのアンケート調査、および高校教員へのグループインタビューから、支援の経験がある先生方の具体的な支援の内容と実際例をいくつか紹介します。

小学校教員

◆子どもの様子を見守り配慮した

（がん治療中の母親から、子どもには病名を伝えていない状況で、体調が思わしくなく子どもの世話を十分にできないということを伝えられて）児童の学校での様子に気を配り、保護者が関わる行事の際に児童が不安を感じないよう配慮したり声をかけたりすることに努めました。児童が事実をどこまで確信し、どのくらい不安を抱えているのか把握しきれず、児童の胸の内を思うとつらかったです。

児童に対して、状況を見守ったり寄り添ったりと心の面での支援をしました。何をしたらいいのかと考えることもあったが、実際には“よりどころ”になれればいいのかと思いました。それでよかったのかどうか…でもそれしかできませんでした。

◆子どもや家族への具体的な支援を行った

（父親から、母親が終末期にあるという相談を受けて）「学校に来ている間に何かあったら怖い」という児童に対して、気持ちが不安定な時に話を聞いたり手紙を書かせたりしました。母の死を目前にした児童に対して、してあげられることは何かと悩みました。

（進行期にある母親から、亡くなった後の子どものことが心配、という相談を受けて）毎日、意識的に児童に話しかけ、お母さんのために今できることをしてあげようと話をしました。また、家族や他の先生方と話し合って、運動会の日に体調が悪い状態でも応援できるよう対応しました。

◆保護者と面談し連携した

（父親ががん治療中）児童の母親と面談をし、できるだけ児童が不安定にならないよう、家庭や学校でできる配慮について話し合いました。保護者の思いをしっかりと受け止めるために、十分に話を聞く場と時間を設けました。

（母親が亡くなったあと、児童の祖母からの相談を受けて）父親・祖父母と電話連絡や連絡帳を利用して児童の様子についてこまめにやりとりをしながら、児童と保護者それぞれ面談をしました。母親が亡くなったショックは本当に大きく、心のケアや人的な環境を整えてあげることが大切だと感じています。



学校での支援の実際（2）

—中学校・高等学校教員—

中学校教員

◆ 子どもへの相談体制を整えた

生徒から相談があり、家庭の状況や気持ちについて話を聞き、食事など困ったことはないか確認をしました。子どもの不安な気持ちを感じると、つらかったです。

(母親より入院前に、生活環境が変わるので子どものケアをしてほしいとの相談を受けて)生徒本人に「困ったことがあつたら言ってほしい」と相談体制を整えました。傷つけてしまう表現は避けようと言葉に気をつけながら、日記のやりとりを通してはげました。

◆ 生活上の具体的な支援を行った

がん治療中の母親より、「通院治療のため家にいないことが多い、子どもが急に具合が悪くなってしまって迎えに行けないことがある」(父親は長期出張中)との相談を受けました。何度もその男子生徒を家まで送ったことがあります。特に(母親の病気について)話したわけではありませんが、他の先生にはつっぱった態度をとっていても、何となく自分には心を開いてくれていた感じがします。

母子家庭の母親からがんであるとの報告を受け、進学についての相談と奨学金についての紹介をしました。入院中の生活支援について、生徒と仲の良い友達の親に協力を得ました。

高等学校教員

◆ 子どもへの相談体制を整えた

高3の生徒が「母が“がん”だ」と相談に来ました。もともと明るい子が無口になって、ボーとしているのに気にかけていました。母親が入退院を繰り返す中、本人は妹の世話と、家事、就職試験もあり、「もやもやした気持ちをどうしたらいいかわからない」と語りました。本人がいつでも話ができるように相談担当教員と共有しつつ、家事などの具体的なアドバイスもしました。

◆ 将來の目標を明確にし、具体的な支援を行った

高2の生徒は母親が亡くなり、気持ちの落ち込みがしばらく続いていました。看護師だった亡き母親が娘にも看護師になってほしいと言っていたことを話題にし、「あなたの夢をきちんと叶えることを最優先にしよう」と目標を明確に持たせ、勉強に集中させました。また、心が落ち着くタイミングを待ち、奨学金などの手続きを担任と一緒に手伝いました。

学校での支援の実際（3）

—養護教諭—



小学校・中学校・高等学校の養護教諭へのアンケート調査から、支援の経験がある先生方の具体的な支援の内容と実際例をいくつか紹介します。

養護教諭

◆ 保健室に来た子どもの話を聴き、安心できる場所を提供した

(小学校) 小2の女児は、学校では笑顔で頑張って過ごしていました。家では祖母を助け、弟の面倒もみていた姿がけなげでした。でも頭痛、腹痛などちょっとしたことでの来室が頻繁にあり、その時はじっくりと話を聴き、心の安定をはかるように努めました。あまり多くは語りませんでしたが、母親の死が近いことも認識していました。

(中学校) 母親が亡くなった女子生徒は、家事や弟の世話をすることへの責任感のあまり、疲れが出て保健室で過ごすことが多くなりました。受容的に話を聴き、本人の将来を見つめながら支援しました。

(中学校) 生徒が不安定だったので、話を聴いたところ、母親ががんで心配だとのことでした。プライベートな事なのであまり話したがらない傾向があるように感じました。とりあえず、いつ来てもいいよという安心感を与えられるようにしなくてはと思いました。

◆ 担任からの依頼で受容的に対応した

(小学校) 児童が不安定になり、担任から対応を依頼され、保健室で話を聴きました。児童が心を開ける場所になるよう温かく受け入れ、がん治療中の母親には、何でもできることがあればと伝えました。

(中学校) 担任から、生徒の母親ががんであり、保健室に来室することもあるかもしれない、生徒の様子を見ていてほしいと依頼されました。生徒が体調不良で保健室に来室した時、がんについて直接話はせず、安心できるように受容的な対応をしました。生徒が抱えていることは、自分自身が体験したことのない状況にあることですので、生徒を見ていてとてもつらかったです。

(高校) 担任が子どもや保護者との面談で得た情報を職員間で情報交換し、病気に関する専門的な部分を養護教諭から説明・補足して子どもを支援できるような体制を整えました。

(高校) 生活保護家庭の父親が亡くなり、担任から、反抗的になったり不満を口にしたりと情緒的に不安定なので話を聞いてやってほしいと依頼がありました。本人からは進学したいが経済的に厳しいので学校をやめて働くことはないとの話があり、受容的に話を聴き、その後も連絡をとりながら見守りました。



学校での支援の実際（4）

—スクールカウンセラー—

◆ 保護者と連携して子どもに対応した

(中学校) 治療のため実家に帰っている母親から、自分が不在で戸惑っていると思うので、娘の話を聞いてあげてほしいと電話がありました。生徒と面談し、母ががんで不安なこと、父との二人生活で戸惑っていることなど話を聴きました。不安を隠せないが、自分がしっかりしなくてはという気持ちの葛藤がみられ、かわいそうでした。

(高校) 親ががんということがわかり、親がいなくなったらどうしようとの不安や、患者である親に対してどんな言葉がけや態度をとればよいのか、手術や抗がん剤治療などを受ける時に家族として何ができるかなどの相談がありました。心の支えになるように心がけるとともに、親戚の方々、地域の方々、学校関係者の協力を得て見守りました。

◆ 教員・スクールカウンセラーとの役割分担をして対応した

(小学校) 担任が生徒や保護者との面談で得た情報を、職員間で情報交換しました。がんという病気に関する専門的な部分を説明・補足して、子どもを支援できるような体制を整えました。

(小学校) 担任より、給食を食べられず精神的に不安定になった児童にどう対応したらいいか、との相談を受け、児童の話を聴いたり休養をとらせたりしました。普通の児童の時と同じように接しました。こちらが特別だと思うと症状が強くなるときもあるので、普通に接しました。また母親が子どもの学校での様子を知って不安定になったので、スクールカウンセラーに面談を依頼しました。母親のカウンセリングは養護教諭では難しいと感じたからです。

◆ 医療につなげて対応した

(中学校) 母親ががんであることを本人は知らされずにいて、口げんかをしたまま母親が亡くなる結果になってしまったことで精神不安定となつたため、専門医のカウンセリングを受けました。

(高校) 母子家庭(生活保護)の生徒の母親ががん手術をすることとなり、生徒は心配のあまり、体調不良となり、それ以来しゃっくり様のけいれんが長時間続くようになってしまいました。発作時の対応を校医と保護者に相談のうえ行い、医療機関にもつなげました。



コラム

スクールソーシャルワーカー (SSW)

スクールソーシャルワーカーは、スクールカウンセラーに続き、平成20年より配置されました。主に福祉の視点から子どもと家庭を支援するため、環境を整えたり関係機関との調整をしたりする仕事です。家庭訪問することもあります。

スクールカウンセラー (SC) へのグループインタビューから、支援の経験がある方々の具体的な支援の内容と実際例をいくつか紹介します。

スクールカウンセラー

◆ さりげない声かけと見守りをした

養護の先生から小2と小6のきょうだいについて、父親ががんであると情報提供がありました。小2の弟はのびのびと明るく過ごしていましたが、SCは会えば声かけしていました。父親が危篤状態になってから、小6の姉は見る間に元気がなくなりました。母親が父親のがんをオープンにされていたので、担任から SC に対してアドバイスが欲しいと求められ、子どもに今後起きやすい心理的反応を具体的に伝えました。父親が亡くなった後は、きょうだいに些細な話をしながら少し元気づけるような声かけを続けました。

別の理由で SC が面談していた小4の子どもの母親から相談があり、母親自身ががんとわかり、病気について子どもに伝えようと思っていること、子どもから SC に話が出る時は受けとめてほしいとのことでした。母親から担任にも話が伝えられ、担任と連携しながら子どもの様子を見守っています。

◆ 校内連携や医療機関との連携を行った

在籍校とは異なる言語指導の教室に通う小3の子どもは、母親が抗がん剤治療で一進一退を繰り返す状況になり、母親がその指導教室に送迎できなくなったことをきっかけに元気がなくなりました。学力も低下してきたので「どうしたものか」と校内で話題に出していました。SC は子どもの気持ちの切り替えを助ける関わりをしながら、学校全体で話し合った結果、その子は親の送迎を必要としないタイプの巡回指導に切り替えられました。その後は状態がよくなってきました。

母親が初期の乳がんだとわかった小学生の子どもが SC との面談で「お母さん、死んじゃうかも。ぼくのせいかも」と打ち明けました。担任に伝え、担任は保護者に気遣いながら連絡をとりました。保護者は子どもがそんな思いをしているとは知らず治療で精一杯だったとのこと、保護者から子どもへきちんと説明することで、本人は安心したとのことでした。

中3の子どもに精神的な不調がみられ、父親も精神的に追い詰められていると通級の先生から相談があり、校長に報告し、子どもの病院を保護者に紹介しました。母親ががん治療のために緊急入院していた頃で、両親は子どもに負担をかけたくない病気のことを隠していましたが、子どもはうすうす感じていたようです。保護者は SC、子どもは通級の先生が担当し、必要に応じて学校全体で対応しました。その後、子どもは無事志望校に受かって卒業していました。

親が学校に望むこと

東京近郊にお住まいの小・中学生のお子さんがいるがん患者さんや、そのご家族にご協力をいただき、インタビュー調査を行いました。学校への親の気持ちを紹介します。

学校との実際の関わり

学校に伝える理由

「抗がん剤を始めるから私の体調も悪くなるだろうなって考えたときに、子どもが落ち込んだりやつたらどうしようって。それに学校って準備してくださいとか、これ持ってきてくださいとか、いろいろあるじゃないですか。忘れ物が増えたりするかもしれないし、先生に家の状況を知っておいてもらった方がいいと思って話しました」（小3の母）

学校への遠慮

「ただでさえ忙しそうな先生に家のことを相談するのもどうかなって。先生もびっくりされるだろうなあとか。あれこれ考えて先生にお話しするまで時間がかかりましたね」（小2の母）

連携の必要性

「クラス替えが毎年あったりすると、その度に先生に伝えなきゃいけないのは気が重いですね。引継ぎされなかつたみたいで」（小2の母）

「担任だけじゃなくて副担任もいるし学年主任の先生もいて、学年で先生たちは持ち上がりで動いてらっしゃるわけだから。どこまで共有するかとか、養護の先生も知っておいてもらった方がいいんじゃないとかね、学年末にでもそういう話し合いがあるといいんでしょうね」（小6の母）

先生の資質

「人と人だと思うんですよね。先生のお人柄や考え方などということには出てくる。その先生なりの思いで聞いて対応してくだされば、それで充分なんですけどね」（小1・小2の母）

グリーフ・ケアとしてのエピソード

「全部終わって娘が学校に行ったときに、先生がわざわざ席替えしてくれて一番窓際の一番後ろの席にしてくれたんですよ。いつでも泣きたいときに泣けるようになってことだったみたい。でもそれをいつまでも続けるわけにはいかないから今週いっぱいねって。来週はまた席替えするし授業中もふだん通りだよって。クラスのみんなも気遣ってくれて、教室に居場所もきちんとあって。もちろん山あり谷ありだけど、娘が自分の気持ちを整理するのを助けてもらつたと感謝してますね」（中3の母）

PTA の憂うつ

「PTA役員を断るのに『病気だから』つて言うと『病名は?』って。病名まで言わないと免除してもらえない雰囲气があって。世話役の方に病名を言っても驚かせるだけじゃないですか。担任や養護の先生経由でね、治療に専念したいことを正規の理由として伝えてもらえないかなって思いますね」（小3・中1の母）

親が学校に望むことを5つにまとめてみました

何気ない声がけで「気にしてるよ」というサインを送ってほしい

「先生が気にかけてくれてるんだって、子どもがちょっと実感できるような、そんな声掛けをしてもらえると嬉しいですね」（小6・中3の母）

「しっかりしなきゃダメじゃないっていう励ましでもいいし、お母さん大変なのに良くやってるねって、その子に合った声がけつてきっとあると思うんですよ」（小4の母）

「お母さんのことで元気がないのかなって思ったら、どうしたの?って話を聴いてくれると、望むことってそんなことですね」（小1の母）

目に見えるような変化があれば見過ごさないで

「子どもの生活ってやっぱり学校が中心で、学校生活は親には見えないから。そこで様子がおかしいとか不安のサインが出ていたら、キャッチしてもらえたって思います」（小4の母）

「子どもに病名は伝えているので何か変化があったら教えてくださいって、個人面談でお願いしました」（小3の母）

家庭と学校とのコミュニケーションを細やかに

「コミュニケーションってことになってきますよね。学校生活は見えないですから。親の病気が原因で不安定になってるんじゃないかというようなことがあれば家庭に連絡を取つてもらえると安心ですね」（小2・小6の母）

これまでと同じように普通に接して見守ってほしい

「学校は変にふれない方がありがたいとも思うんですよね。先生には知つていただきたいけれど、いつも通り接してほしいなって」（小1の母）

「子どもがなるべくこれまでと同じように生活できることを心がけているので、先生達もそれを見守ってくださると嬉しいですね」（小4の母）

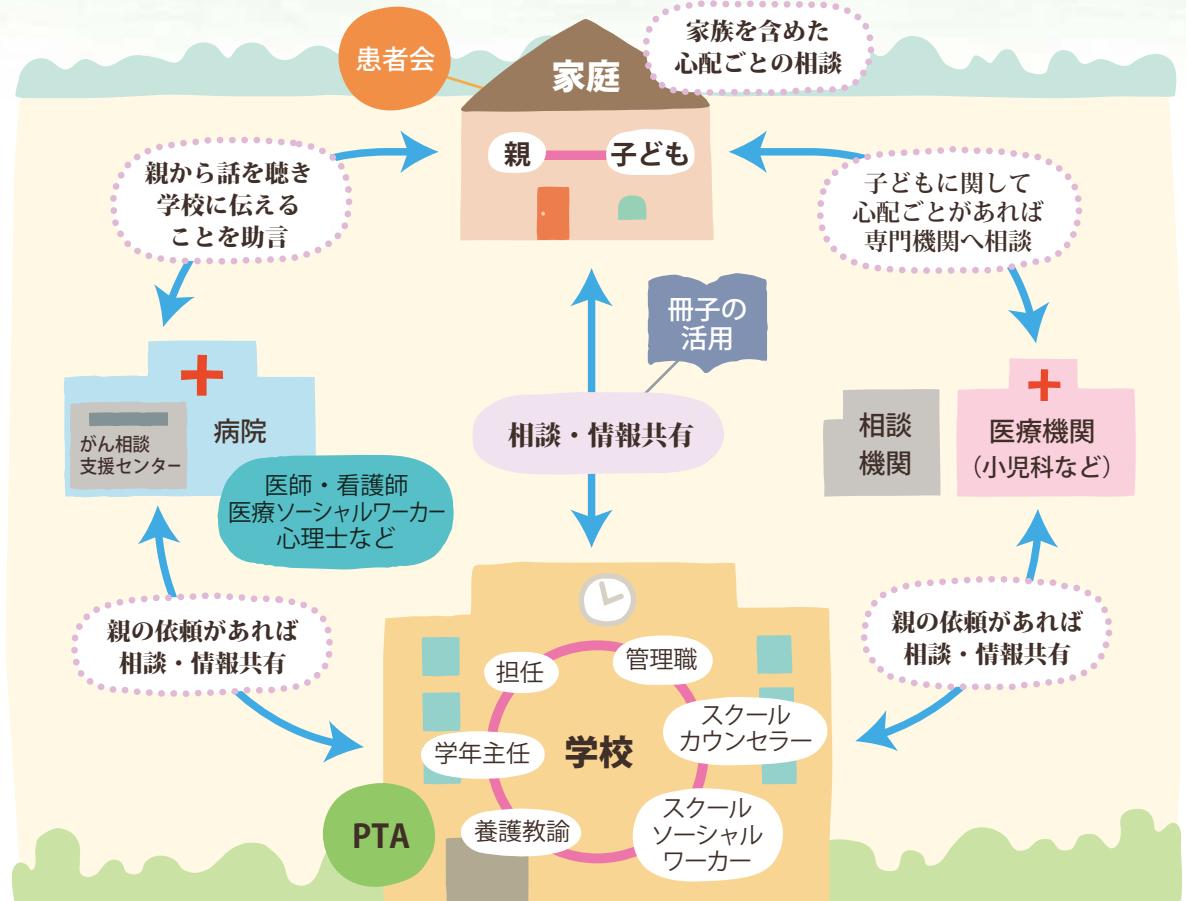
特別なケアはいらないので親ががん治療をしていることを心に留めてほしい

「先生が親の病気のことを知らないと、どうして最近この子は不安定なんだろうってわからなくなつきつと上手くいかないと思うんですよね」（小2・小6の母）

「子どもに何かあったときに、親御さんのことかな、それとも学校で何かあったのかなって、多方面から考えていく1つの情報として先生に捉えておいてもらえたたらと思って」（小4の母）

「先生にお話ししたことは子どもにも伝えました。だから何かあったら先生に相談してねって言っておいたんです。直接親に言えないことも出てくるかなと思ったし、学校の先生とも信頼できる関係を築いてくれたらと思って」（中1の母）

子どもを支えるための連携



子どもの学校を中心とした連携が望されます。学校は子どもにとって社会との接点を持つ大切な場であり、そこでの配慮は子どもと家族の大きな安心につながります。

学校内 - 必要に応じてチーム編成 -	
■ 管理職（校長・教頭等）・学校の責任者	・地域の関係機関を含めた体制整備など
■ 学級担任・学級内の子ども一人一人の理解と学級づくりなど	
■ 学年主任・学年全体の連絡調整や指導助言など	
■ 養護教諭	・子どもの心身に関する健康保健業務など
■ スクールカウンセラー	・子どもと家族に対する心理的支援
■ スクールソーシャルワーカー	・子どもの置かれた環境面に対する福祉的支援
■ 特別支援教育コーディネーター	・発達障害等、特別なニーズのある子どもについて学校内外の連携や調整

学校外 - 必要に応じて紹介・連携 -	
■ 親の治療を行っている病院	
■ がん相談支援センター・全国のがん診療連携拠点病院に設置されている相談窓口（誰でも無料で相談可能）	
■ 医療機関（小児科、児童精神科など）	
■ 子どもの心身の不調に関する相談、治療	
子どもに関する公的相談機関	
■ 教育相談室（教育センター）	・子どもの学校（園）生活や発達、子育てに関する相談
■ 子ども家庭支援センター	・18歳未満の子どもと家庭のためのあらゆる相談
■ 児童相談所・18歳未満の子どもと家庭のための専門的な相談	
■ 市区町村の子どもに関する窓口・学童保育、ショートステイ、学費、奨学金などの相談	

学校にできること

学校での支援のポイントをまとめました。これは学校だけでなく、子どもに関わる周りの大人にできることとも言えるでしょう。

支援のポイント

- ① 子どもの日常生活を維持する
- ② 子どもの様子や変化を観察し、サインや兆候に気づく
- ③ 気持ちを表現できるような場を提供する
- ④ 子どもが重荷を一人で抱え込まないように気をつける
- ⑤ 家族の一員としてできることを子どもと一緒に考える
- ⑥ 問題は必ずしもがんに関係しているとは限らないことを忘れない
- ⑦ 特別扱いではなく、さりげない配慮をする
- ⑧ 支援の本質は、安心できるように支えること

学校での具体的な支援にあたっては、子ども本人・家族の意向を確認した上で、プライバシーに配慮しながら、学校行事の際に個別の配慮を行う、進学や学費など経済面・生活面の支援窓口を紹介するなどの対応も役に立つでしょう。

おわりに

がんはどの家庭にも起こりうる家族全体の危機です。子どもは大人が思っている以上に敏感に状況を察知し不安を感じてしまう一方、大人が思っている以上に困難を乗り越えていく力を持っています。

子どもたちが多く時間を使い学校でのさりげない支援が、子どもたちに安心を与え、“大丈夫”と思える力を育むことにつながります。この冊子が、子どもの支援のために、家族と学校が手を携えていくきっかけになれば、と願っております。

すべての子どもたちの健やかな成長と発達を願って…

放送大学・小林真理子



関連情報



がん・サポート情報

- 国立がん研究センター がん対策情報センター がん情報サービス (<https://ganjoho.jp>)
*全国のがん相談支援センターについては、上記HP内「がん相談支援センターを探す」を参照ください。



- NPO 法人 Hope Tree がんになった親と子どものためのサポート情報
(<http://www.hope-tree.jp>)



- NPO 法人子どもグリーフサポートステーション 全国のグリーフサポート情報
(<http://www.cgss.jp/network.html>)



参考になる図書・冊子

- ★「がんのひみつ」(まんがでよくわかるシリーズ) ▶ 田川滋、学研パブリッシング、2013.10
(<https://kids.gakken.co.jp/himitsu/089/> 学研キッズネット)

- ★「おかあさんだいじょうぶ?」▶ 乳がんの親と子どものためのプロジェクト・作、黒井健・絵
(乳がんになったお母さんと子どもが見る絵本、解説付き)、小学館、2010.2

- ★「わたしだって知りたい! ~親が“がん”になったとき子どもに何を伝え、どう支えるか~」
▶ Hope Tree プロジェクト・チーム、M. アッシュエンブレナー制作協力、2011.12

- ★「がんはどんな病気? ~親ががんになったとき知っておいてほしいこと~」
▶ Hope Tree プロジェクト・チーム制作協力、2012.9

- ★「だれも分かってくれない! ~思春期の子どもにとって、親ががんの患者であるということ~」
▶ K. マッキー、Hope Tree プロジェクト・チーム制作協力、2013.10

*以上、3つの冊子は、ノバルティスファーマ株式会社の HP からダウンロード可能

- ★「大切な人を亡くした生徒を支えるために~教師向けガイドブック~」
▶ ダギーセンター編、日本語版発行: NPO 法人全国自死遺族総合支援センター、2012.11

- ★「教育現場におけるグリーフサポート~死別体験にどう向き合うか~」
▶ ダギーセンター編、日本語版 DVD・ブックレット発行: グリーフサポートせたがや、2016.7

- ★「学校における大切な人を亡くした子どもへの対応ハンドブック」▶ 小林明子・茅野理恵、2015.12
(<http://tomokoba.mt-100.com/?p=65> よりダウンロード可能)

謝辞

お忙しい中アンケート調査やインタビュー調査にご協力くださり貴重なご意見を寄せてくださいました、栃木県の養護教諭と小・中学校の教員の皆さん、長崎県の高等学校教員の皆さん、東京都北区のスクールカウンセラーの皆さん、またインタビュー調査に快く応じてくださり貴重な体験談を語ってくださいました患者さまとご家族の方々に、心より御礼申し上げます。そして、初版の冊子を手に取ってください、アンケートに回答してくださいました、患者さまやご家族の方々、医療関係者、学校関係者の皆さん、たくさんのご意見をありがとうございました。



発 行 2019年3月20日

編 著 小林真理子 放送大学大学院 臨床心理学プログラム

分 担 執 筆
(作成当時)
神前 裕子 聖心女子大学 現代教養学部 心理学科
小嶋リベカ 国立がん研究センター中央病院 緩和医療科
塩田このみ 東京都世田谷区教育相談室
久野美智子 聖路加国際病院 こども医療支援室

本冊子は、平成30年度科学研究費補助金（基盤研究（C）15K01771）「がん患者の子どもと家族への支援リソースの開発に関する研究」（H27-30 研究代表者 放送大学 小林真理子）の助成を受けて発行されました

本冊子は、NPO 法人 Hope Tree の協賛を得て増刷しました（2023.9.1）

イラスト よしのまゆみ

引用文献

- 井上泉、東尚弘、岩本桃子ほか (2015) : A national profile of the impact of parental cancer on their children in Japan. *Cancer Epidemiology*, 39(6): 838-841
- 小林真理子 (2013) : 親のがんを子どもにどう伝え、どう支えるか、がん看護 18巻1号 別冊
- 小林真理子・神前裕子・高橋都 (2018) : がんの親をもつ子どもへの学校での支援の実態と意識 -養護教諭への質問紙調査から-、*学校保健研究* 58巻1号 : 15-24
- The Dougy Center (1999) : *Helping Children Cope with Death*



When a Parent has Cancer: Supporting Children in School setting

親ががんになったとき

子どものために学校にできること - 第2版 -



Support for Children with Parental Cancer at School

発行者・連絡先 聖心女子大学 現代教養学部 心理学科 小林研究室

〒150-8938 東京都渋谷区広尾 4-3-1

TEL. 03-3407-5811 (大学代表)

e-mail makobayashi@u-sacred-heart.ac.jp

